



2023 年

6 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 6 月 4 日 : マルコ福音書 2 : 1 - 12 .

『 求めに応じて 』

・ 6 月 11 日 : マルコ福音書 2 : 13 - 17 .

『 神が招く人たち 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

マルコ福音書を読むと、イエスはかなり早い段階で人心を掌握していたことがわかります。イエスが“再びカファルナウムに舞い戻った”、という表現だけでも、その活動が早くも注目されていた事実をよく示しています。

奥地の故郷のナザレとは違い、ガリラヤ湖畔の人々にはイエスの言動は新鮮な驚きをもって受けとめられたようです。

その日もイエスは、家中に集まった多くの聴衆の前で話をしていると、立錫の余地もない家に入り切れない者らが外に溢れています。すると、屋根を剥がしてそこから突然、瓦礫とともにイエスの目の前に、布にくるまった一人の病人が吊り下ろされます。会衆は、この場違いな行動はいったい何事かと理解に苦しみます。

彼らの視線は再び家主のイエスに注がれます。このような乱暴な行為は、往々にして一喝されるのが世の常だからです。ところがイエスは何ら取り乱すことなく一言、「子よ、あなたの罪は赦される」と。よく見るとその人の体には明らかに麻痺の症状があります。屋根を剥がして降りてくるだけの体力がこの病人にはないことは一目瞭然です。

では屋根の損壊の罪は誰が負えばよいのか。その場に居合わせ、あらゆる事を罪に定める律法学者らの見立てでは、屋根の損壊はさて置き、何はともあれ、間髪入れずにイエスが発した麻痺の病人への特赦こそ、神を差し置いた越権（流神）行為にあたると見分します。さらにまた、病人の体の麻痺も、すでに何らかの過去の罪の報い(?)の形跡が見て取れ、こちらの無罪放免の是非の判断…と、律法学者の頭の中は大忙しです。

しかしイエスは病人ばかりか、そんな彼らの心中の見立てにも対応します、「では、麻痺の人に、あなたの罪は赦される、というのと、起きて自分の床を担いで歩け、と言うのとどちらがたやすいか」。

イエスは知っています。今この時の最大の問題は、屋根の破損でも、法的手続きでもなければ、神への冒瀆でもなく、聴衆の眼前に横たわる病人の心身の痛みであることを。それさえ解決すれば、残りの問題は全てご自身が引き受ければよいことでした。イエスは大工ヨセフの子でもあり、屋

根の修理はお手の物です。

イエスは、律法学者に問いかけたそのままの言葉を、今度は眼前に臥す病人に向かって語りかけます、「起きて自分の床を担ぎ、自分の家に帰りなさい」と。その瞬間、彼の身心にあった麻痺も痛みも、罪の“形跡”さえも、無化したのは言うまでもありません。重荷を負って苦勞していたその人は、今度は休む間もなく社会へと復歸して行きます。

聴衆は、イエスのその業も神の存在と深く関わっていることを悟ったのでした。

《 神が招く人たち 》

朱に交われれば赤くなる、この言葉は本来、人は交わる相手次第で“善”にも“悪”にも感化されることを意味しましたが、近年は“悪”に感化されるという意味の方がより強くなりました。

何らかの学派に所属した経験はなく、正式な肩書はないものの、ユダヤの民衆から“ラビ（教師）”としての扱いを受けるイエスは、分け隔てなく世の様々な人々と交流します。

その日イエスは徴税人のレヴィの家にあります。家主は通行税を徴収するのが本職でしたが、ある日、ガリラヤ湖畔の公道で職務を遂行していたところ、イエスに「私に従いなさい」と言われて、今はそうしています。彼の家は多くの人々を収容することができ、この世の様々な地位にある人々や身分の蔑まれた人々に至るまで、なぜかその日は一堂に会しています。別のマタイ福音書を読むと、後者は食事中に後から来て合流したような順序になっています。イエスは彼らの中心に居合わせ、親しく語り合っています。彼らにとってイエスこそ、かけがえのない人生の教師なのです。

ところが、先客（？）の、社会的に地位のあるファリサイ人や律法学者たちには、なぜかその光景は受け入れ難いもののようです。今、イエスと語り合っているのは、おそらく家主のレヴィよりも地位の低い使用人レベルの「多くの徴税人や罪人たち」であり、彼らとの接触を完全になくすことは誰にも不可能だったとしても、地位ある人々にとっては、あまり顔を

会わせたくもない連中でした。そんな者達同士がその日、大部屋とは言え、同じ屋根の下に集まったのです。地位ある人々は、まだイエスにも愛弟子たちにも、これといった嫌疑をかけていたわけではありません。けれども、イエスがユダヤの社会の“問題児”たちと和気藹々と接して語り合っているのを見ると不審に思い、彼の弟子たちに問い質します、「イエスは徴税人や罪人たちと一緒に食事をするのか」と。

どんな心のつぶやきにも対応するイエスは、やや距離を置いて座っている人々の疑念をも察知します。弟子たちが返答に窮していると、急遽、代わってイエスが彼らに答えます。

丈夫な人には医者はいらない。必要とするのは病人である。私が来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである。

神キリストの目からは、完全なる人間など何処にもおらず、社会的地位とは無関係に全ての人間は罪人であり、それをいつ自覚し、悔い改めるのか、その時こそが、神の赦しと救いの始まりであることを教えています。